

シンポジウム I 「消化管バリア機能：基礎と臨床の接点」

| | |
|------|--|
| 司会 | 谷中昭典（筑波大学医学医療系臨床医学域 筑波大学附属病院日立社会連携教育研究センター） |
| | 加藤伸一（京都薬科大学病態薬科学系薬物治療学分野） |
| 基調講演 | 秋葉保忠（UCLA Dept of Medicine & West Los Angeles Veterans Affairs Medical Center (West LA VAMC)） |

【司会の言葉】

消化管は、摂取された食物を消化、吸収する一方で、食物、また食物とともに摂取される病原性を持つ細菌やウイルス、抗原性を持つ食物タンパク質や化学物質に暴露を受けている。消化管にはそれらの暴露物質に対する防御としてバリア機構を備えており、消化管粘膜上皮は常に粘液を産生することにより表面を覆うように粘液層を形成するとともに、抗菌ペプチドを産生、また管腔へ免疫グロブリンを分泌し積極的に免疫応答を行っている。また消化管上皮細胞は、細胞間接着構造体であるタイトジャンクションが細胞外周を取り囲むことによって細胞間が密着され、物理的な障壁を形成している。また最近では粘膜内に存在する腸内細菌がそのバリア機構の一端を担っていることも解ってきた。免疫応答の異常により、これらバリア機構が破綻すると消化管の透過性は亢進し、消化管機能障害を引き起こすが、これまでに炎症性腸疾患を代表とした様々な疾患にこのバリア機構の破綻が関わっていることが知られており、疾患解明の大きな鍵を握っている。本シンポジウムでは、消化管バリア機能に関する基礎的な検討から、臨床的な得られた新たな知見まで幅広く演題を募集し、議論を深めたい。